

一般講演 65

屈折視機能：診断・治療

Refraction, Visual Function: Diagnosis/ Treatment

2023年10月8日(日) 8:50-10:02

第11会場 | 東京国際フォーラム 4F G409

座長：五十嵐 多恵 (医科歯科大)

日-講演 65-2

長眼軸長眼における片眼白内障手術の矯正方法と術後目標屈折値

安 博遠^{1,2}、長谷川 優実¹、森 洋斉³、後藤 聡^{4,5,6}、
鳥居 秀成⁷、柴 琢也⁸、宮田 和典³、大鹿 哲郎¹1:筑波大、2:防衛医大、3:宮田眼科医院、4:東京医療センター、5:大阪大、6:
カリフォルニア大・パークレー校、7:慶應大、8:六本木柴眼科

【目的】長眼軸長眼における片眼白内障手術の矯正方法と術後目標屈折値について調べる。

【対象と方法】両眼の眼軸長が26.5mm以上で、片眼のみ白内障手術を行う予定とした50例(52.4 ± 13.7歳)で後ろ向きに検討した。術前後の主な矯正方法、術眼の眼軸長、術後目標屈折値、術前後の矯正視力および自覚屈折、非術眼の眼軸長、矯正視力および自覚屈折についてカルテより抽出した。眼鏡群とコンタクトレンズ(CL)群の術後目標屈折値を比較した。

【結果】術前の矯正方法は、眼鏡13例、CL26例、矯正なし1例、不明10例であった。非術眼の等価球面値は、眼鏡群が $-6.29 \pm 1.72D$ で、CL群の $-9.26 \pm 3.87D$ より有意に近視が弱かった($p = 0.01$)。術後目標屈折値は眼鏡群が $-4.16 \pm 1.80D$ で、CL群の $-2.22 \pm 3.17D$ より有意に強い近視であった($p = 0.02$)。-1D未満を選択した症例は、眼鏡群が0例、CL群は13例であった。眼鏡群1例とCL群1例で、術眼の白内障術後にもう片眼の白内障手術を希望したため手術を行なった。術前後で眼鏡とCLが変化した症例はなかった。

【結論】長眼軸長眼の片眼白内障手術では、CL使用者は眼鏡使用者より術後の正視を望む症例が多かった。

【利益相反公表基準】該当有

【IC】取得有 【倫理審査】承認有